

百合

芥川龍之介

青空文庫

良平りょうへいはある雑誌社に校正の朱筆しゆふでを握っている。しかしそれは本意ではない。彼は少しの暇さえあれば、翻訳ほんやくのマルクスを耽読たんどくしている。あるいは太い指の先に一本のバットを樂しみながら、薄暗いロシアを夢みている。百合ゆりの話もそう云う時にふと彼の心を掠かすめた、切れ切れな思い出の一片いっぺんに過ぎない。

今年七歳しちさいの良平は生まれた家の台所に早い午飯ひるめしを掻かきこんでいた。すると隣の金三きんぞうが汗ばんだ顔を光らせながら、何か大事件でも起つたようにいきなり流し元へ飛びこんで来た。

「今ね、良ちゃん。今ね、二本芽にほんめの百合ゆりを見つけて来たぜ。」

金三は二本芽を表わすために、上を向いた鼻の先へ両手の人さし指を揃そろえて見せた。

「二本芽のね？」

良平は思わず目を見張った。一つの根から芽の二本出た、その二本芽の百合と云うやつは容易に見つからない物だったのである。

「ああ、うんと太い二本芽のね、ちんぼ芽のね、赤芽のね、……」

金三は解けかかった帯の端に顔の汗を拭きながら、ほとんど夢中にしゃべり続けた。それに釣りこまれた良平もいつか膳ぜんを置きざりにしたまま、流し元の框かまちにしゃがんでいた。

「御飯を食べてしまえよ。二本芽でも赤芽でも好いいじゃないか。」
母はだだ広い次びろの間に蚕まの桑かいこくわを刻きざみ刻きざみ、二三度良平へ声をか

けた。しかし彼はそんな事も全然耳へはいらないうように、芽はどのくらい太いかとか、二本とも同じ長さかとか、矢つぎ早に問を発していた。金三は勿論雄弁だった。芽は二本とも親指より太い。丈も同じように揃っている。ああ云う百合は世界中にもあるまい。……

「ね、おい、良ちゃん。今直見にあゆびよう。」

金三は狡るずそうに母の方を見てから、そつと良平の裾すそを引いた。二本芽の赤芽のちんぼ芽の百合を見る、——このくらい大きい誘惑はなかった。良平は返事もしない内に、母の藁草履わらぞうりへ足をかけた。藁草履はじつとり湿しめつた上、鼻緒はなおも好い加減ゆる緩んでいた。

「良平！ これ！ 御飯を食べかけて、——」

母は驚いた声を出した。が、もう良平はその時には、先に立つて裏庭を駈け抜けていた。裏庭の外には小路の向うに、木の芽の煙けふつた雑木林ぞうきばやしがあつた。良平はそちらへ駈けて行こうとした。すると金三は「こつちだよ」と一生懸命わめに喚きながら、畑のあゝる右手へ走つて行つた。良平は一足踏み出したなり、大仰おおぎようにぐるりと頭を廻すと、前こごみにばたばた駈け戻つて来た。なぜか彼にはそうしないと、勇ましい気もちがしないのだった。

「なあんだね、畑の土手どてにあるのかね？」

「ううん、畑の中にあるんだよ。この向うの麦畑の……」

金三はこう云いかけたなり、桑畑の畔あぜへもぐりこんだ。桑畑のな中生十字な字はもう縦横たてよこに伸ばした枝に、二銭銅貨ほどの葉を

つけていた。良平もその枝をくぐりくぐり、金三の跡を追って行った。彼の直鼻すくの先には継つぎの当った金三の尻あとに、ほどけかかった帯が飛び廻っていた。

桑畑を向うに抜けた所はやつと節ふしだ立った麦畑だった。金三は先に立ったまま、麦と桑とに挟はさまれた畔はたをもう一度右へ曲りかけた。素早い良平はその途端とたんに金三の脇わきを走り抜けた。が、三間と走らない内に、腹を立てたらしい金三の声は、たちまち彼を立止らせてしまった。

「何だい、どこにあるか知ってもしない癖に！」

悄しよげ気返った良平はしぶしぶまた金三を先に立てた。二人はもう駈かけなかつた。互にむつつり黙ったまま、麦とすれすれに歩いて

行つた。しかしその麦畑の隅の、土手の築いてある側へ来ると、金三は急に良平の方へ笑い顔を振り向けながら、足もとの畦うねを指さして見せた。

「こう、ここだよ。」

良平もそう云われた時にはすっかり不機嫌ふきげんを忘れていた。

「どうね？ どうね？」

彼はその畦のぞを覗きこんだ。そこには金三の云つた通り、赤い葉を巻いた百合の芽が二本、光沢つやの好い頭とがを尖らせていた。彼は話には聞いていても、現在この立派りっぱさを見ると、声も出ないほどびつくりしてしまつた。

「ね、太かろう。」

金三はさも得意そうに良平の顔へ目をやった。が、良平は頷うなずいたぎり、百合の芽ばかり見守っていた。

「ね、太かろう。」

金三はもう一度繰返してから、右の方の芽にさわろうとした。すると良平は目のさめたように、慌あわててその手を払いのけた。

「あつ、さわんなさんなよう、折れるから。」

「好いいじゃあ、さわったつて。お前さんの百合じゃないに！」

金三はまた怒り出した。良平も今度は引きこまなかつた。

「お前さんのでもないじゃあ。」

「わしのでないつて、さわつても好いいじゃあ。」

「よしなさいつてば。折れちまうよう。」

「折れるもんじゃよう。わしはさつきさんざさわったよう。」

「さつきさんざさわった」となれば、良平も黙るよりほかはなかつた。金三はそこへしやがんだまま、前よりも手荒てあらに百合の芽をいじった。しかし三寸に足りない芽は動きそうな気色けしきも見せなかつた。

「じゃわしもさわろうか？」

やっと安心した良平は金三の顔色かおいろを窺うかがいながら、そつと左の芽にさわって見た。赤い芽は良平の指のさきに、妙にしっかりした触覚しよっかくを与えた。彼はその触覚の中に何とも云われない嬉しさを感じた。

「おおなあ！」

良平は独り微笑^{びしょう}していた。すると金三はしばらくの後、突然またこんな事を云い始めた。

「こんなに好^いいちんぼ芽^めじや球^{たま}根^ねはうんと大きかろうねえ。——え、良ちゃん掘^ほつて見^みようか？」

彼はもうそう云^いつた時には、畦^{うね}の土^{つち}に指^{ゆび}を突^つこんでいた。良平のびつくりした事はさつきより烈^{はげ}しいくらいだった。彼は百合の芽も忘^{わす}れたように、いきなりその手を抑^{おさ}えつけた。

「よしなさいよう。よしなさいってば。——」

それから良平は小声^{ここゑ}になつた。

「見つかるよ、お前^{まへ}さん、叱^{しか}られるよ。」

畑の中に生^なえている百合は野原や山にあるやつと違^{ちが}う。この畑

の持ち主ぬし以外に誰も取る事は許されていない。——それは金三にもわかつていた。彼はちよいと未練そうに、まわりの土へ輪を描かいた後のち、素直に良平の云う事を聞いた。

晴れた空のどこかには雲雀ひばりの声が続いていた。二人の子供はその声の下に二本芽にほんめの百合を愛しながら、大真面目おおまじめにこう云う約束を結んだ。——第一、この百合の事はどんな友だちにも話さない事。第二、毎朝学校へ出る前、二人一しよに見に来る事。……

翌朝二人は約束通り、一しよに百合のある麦畑へ来た。百合は赤い芽の先に露の玉を保っていた。金三は右のちんぼ芽を、良平は左のちんぼ芽を、それぞれ爪で弾きながら、露の玉を落してやった。

「太いねえ！——」

良平はその朝もいまさらのように、百合の芽の立派さに見惚れていた。

「これじゃ五年経つただね。」

「五年ねえ？——」

金三はちよいと良平の顔へ、蔑すみに満ちた目を送った。

「五年ねえ？ 十年くらいずらじや。」

「十年！十年ってわしより年上としうえかね？」

「そうさ。お前さんより年上としうえずらじゃ。」

「じゃ花とが十咲とおくかね？」

五年の百合ゆりには五つ花が出来、十年の百合には十花とおが出来る、

——彼等はいつか年上としうえのものにそう云う事を教えられていた。

「咲くさあ、十とおぐらい！」

金三は厳おごかに云い切った。良平は内心たじろぎながら、云い訣わけ

のように独り言を云った。

「早く咲くと好いいな。」

「咲くもんじゃあ。夏でなけりや。」

金三はまた嘲笑あざわらった。

「夏ねえ？ 夏なもんか。雨の降る時分じぶんだよ。」

「雨の降る時分は夏だよ。」

「夏は白い着物を着る時だよ。——」

良平も容易に負けなかった。

「雨の降る時分は夏なもんか。」

「莫迦ばか！ 白い着物を着るのは土用どようだい。」

「嘘うそだい。うちのお母さんに訊きいて見ろ。白い着物を着るのは夏

だい！」

良平はそう云うか云わない内に、ぴしやり左の横よこ鬚びんを打たれ

た。が、打たれたと思った時にはもうまた相手を打ち返していた。

「生意なまいき気！」

顔色を変えた金三は力一ぱい彼を突き飛ばした。良平は仰向けあおむに麦の畦うねへ倒れた。畦には露が下りおりていたから、顔や着物はその拍子ひょうしにすっかり泥になつてしまった。それでも彼は飛び起きるが早いか、いきなり金三へむしゃぶりついた。金三も不意を食つたせいか、いつもは滅多めったに負けた事のないのが、この時はべたりと尻餅しりもちをついた。しかもその尻餅の跡は百合の芽の直すぐに近所だつた。

「喧嘩けんかならこつちへ来い。百合の芽を傷いためるからこつちへ来い。」
金三は顛あじをしゃくいなながら、桑畑の畔くろへ飛び出した。良平もベそをかいたなり、やむを得ずそこへ出て行つた。二人はたちまちとつく取組み合いを始めた。顔を真赤にした金三は良平の胸ぐらを掴つかま

えたまま、無茶苦茶に前後へこづき廻した。良平はふだんこうやられると、たいてい泣き出してしまふのだった。しかしその朝は泣き出さなかつた。のみならず頭がふらついて来ても、
剛情ごうじように相手へしがみついていた。

すると桑の間から、突然誰かが顔を出した。

「はえ、まあ、お前さんたちは喧嘩かよう。」

二人はやつと掴つかみ合いをやめた。彼等の前には薄痘痕うすいものある百姓の女房が立っていた。それはやはり惣そうきち吉と云う学校友だちの母親だった。彼女は桑を摘つみに来たのか、寝間着てぬぐいに手拭てぬぐいをかぶつたなり、大きい箆やじるを抱かかっていた。そうして何か迂散うさんそうに、じろじろ二人を見比べていた。

「相撲すもうだよ。叔母おばさん。」

金三はわざと元気そうに云った。が、良平は震ふるえながら、相手の言葉を打ち切るように云った。

「嘘つき！ 喧嘩けんかだ癖くせに！」

「手前こそ嘘つきじゃあ。」

金三は良平の、耳みみたぶ朶つかを掴つかんだ。が、まだ仕合せと引張らない内に、怖い顔をした惣吉の母は楽らくらく々とその手を 《も》ぎ離はなした。

「お前さんはいつも乱暴だよ。この間うちの惣吉の額ひたいに疵きずをつけたのもお前さんずら。」

良平は金三の叱られるのを見ると、「ざまを見ろ」と云いたか

った。しかしそう云つてやるより前に、なぜか涙がこみ上げて来た。そのとたんにまた金三は惣吉の母の手を振り離しながら、片足ずつ躍るように桑の中を向うへ逃げて行つた。

「日金山ひがねやまが曇つた！ 良平の目から雨が降る！」

その翌日は夜明け前から、春には珍らしい大雨おおあめだつた。良平りょうへいの家うちでは蚕かいに食くわせる桑たぐわの貯たくわえが足りなかつたから、父や母は午頃ひるごろになると、蓑みのの埃ほこりを払はらつたり、古い麦藁帽むぎわらぼうを探し出し

たり、畑へ出る仕度したくを急ぎ始めた。が、良平はそう云う中にも肉に桂つげいの皮を噛かみながら、百合ゆりの事ばかり考えていた。この降りでは事によると、百合の芽も折られてしまったかも知れない。それとも畑の土と一しよに、球根たまごとそっくり流されはしないか？…

…
「金三きんぞうのやつも心配ずら。」

良平はまたそうも思った。すると可笑おかしい気がした。金三の家は隣だから、軒のきづた伝たいに行きさえすれば、傘かさをさす必要もないのだった。しかし昨日きのうの喧嘩けんかの手前、こちらからは遊びに行きたくなかった。たとい向うから遊びに来て、始はじめは口一つ利きかずいでやる。そうすればあいつも悄しよげ気げるのに違ちがいない。………（未完）

(大正十一年九月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

百合

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>